

岩手県野田村の支援・交流活動報告（2014年1月25日）

穏やかな晴天の下、2014年初めての定期便が野田村に向かって出発しました。本日の活動の参加者は、市民参加者8名（ボランティア講師1名含む）、学生17名、教員1名の全部で26名でした。移動中の車中では、全員の自己紹介と学生事務局が作成した活動記録のDVDを上映いたしました。震災直後の様子や今までの活動内容がよく分かる内容で、大変好評でした。



道の駅「おりつめ」での記念撮影



俳句教室の様子

この日の活動は、当初仮設住宅から新設された公団住宅への引越しのお手伝いでしたが、入居説明会などが遅れたために、引越し日が2月1～2日に延期され、急きょ活動内容の変更をしなければならない状況でした。そこで、今まで続けてきた、児童クラブでの学習支援と、中学仮説集会所での茶話会を行うことになりました。また、市民参加者の池田さんのご協力で、茶話会と一緒に俳句教室を開催する運びとなりました。そして、今回から新しく中高生のためのカフェ、「のんちゃんの隠れ家」を運営することになりました。

この日は道路に雪もなく、順調に進み、野田村には予定通りの10時半に到着しました。児童クラブではインフルエンザや胃腸かぜなどの感染症がはやっている関係で参加している子供は3名のみでした。しかし、感染症にも負けない子供たちだけあって、元気がいつも以上によく、大学生の皆さんが入った瞬間から走りっぱなしの一日を過ごしたようです。また、午後からは6名の元気な子供たちが加わり、3時頃にはボランティアの皆さんは、疲れきった様子でした。

中学仮説集会所では、茶話会とはじめての俳句教室が開催されました。この日は、公団住宅の入居説明会などがあって、参加者が少なくさびしいスタートとなりました。ただ、学生事務局が用意したテーブルカバーやお花などが気持ちを温かくしてくれました。初めての俳句教室では、野田村仮説住宅で生活していらっしゃる俳人、佐藤勲氏が加わり、震災にまつわる俳句を紹介してくださいました。

佐藤さんの作品、「身一つとなりて薫風ありしかな」をご紹介いただきました。この句は、思いも寄らない大津波に遭い、家と半生で積み上げた形あるものを全て流失し、茫然自失の日々から覚め

た時、かけがえのない家族がいて、今年も生まれたばかりの薫風が吹いていたことを表現した句であるご紹介いただきました。また、俳句がご縁で、いろいろと新たなご縁ができたことなどを話してくださいました。そのほか、震災にまつわる俳句の紹介もいただきました。参加者の皆さんにとっては震災をもう一度考える大変貴重な時間となりました。その後は、池田さんのご指導の下で、俳句を学び、一人ひとり作品を作っていたようです。帰りのバスの中では、ボランティアの皆さんが作った俳句の紹介がありました。



児童クラブでの学習支援



のんちゃんの隠れ家の様子

また、初めてオープンした中高生向けカフェ「のんちゃんの隠れ家」は午前中はお客さんが一人で少し寂しいスタートとなったようです。午後からは小学6年生も加わり、賑やかな笑い声などが聞こえてきました。運営を担当した学生事務局からは、場所が「隠れ家」にぴったりの場所で、今後看板の設置やお茶や駄菓子などの準備、そして楽しいプログラムの準備などで充実していきたいという意気込みの声がありました。今後の展開を期待したいです。

午後からは、中止となっていた引越しのお手伝いの要請があったので、茶話会の参加者の一部は、新設された公団住宅に出向き、引越しのお手伝いをさせていただきました。いろいろと不満の声もあったと聞きましたが、新設の公団住宅は日当たりもよく、広々としていて、新築の匂いがして、気持ちの良い住宅環境でした。また、引越しをなさる方も少し高揚していて笑い声の絶えないお手伝いとなりました。

帰りのバスの感想タイムでは、学習支援にいった学生から野田村の子供たちから「また来てね！」と先に挨拶され大変うれしかったという声や、「人生で始めて俳句に出会いました。素敵な時間をありがとうございました。」などの声が多く、また機会があれば参加したいという声や「新しい出会いがありました」との声がありました。今年一年も、きらきら笑顔の絶えないチーム・オール弘前の定期便であることを確信した一日でした。ありがとうございました。

(担当:李永俊)